

新約聖書におけるマカリズム (幸いの宣言)*

原 口 尚 彰

1. はじめに

初期キリスト教におけるマカリズム(幸いの宣言)は、文頭に μακάριος/μακάριοι という言葉を置き、その後、幸いとされる根拠またはその状態の描写が続く文学形式であり、ヘブライ語の אֲשֶׁרִי を μακάριος/μακάριοι と訳した七十人訳の用語法に倣ったものである¹。旧約・ユダヤ教に由来するマカリズム(幸いの宣言)は、新約聖書においては広汎に使用され、福音書や使徒言行録等の物語文学にも(マタ 5: 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11; 11: 6; 13: 16; 16: 17; 24: 46; ルカ 1: 45; 6: 20, 21, 22; 7: 23; 10: 23; 11: 27, 28; 12: 37, 38, 43; 14: 14, 15; 23: 29; ヨハ 13: 17; 20: 29; 使 20: 35)、書簡文学にも(ロマ 4: 7, 8; 14: 22; I コリ 7: 40; ヤコ 1: 12, 25; I ペト 3: 14; 4: 14)、黙示文学にも出て来る(黙 1: 3; 14: 13; 16: 15; 19: 9; 20: 6; 22: 7, 14)²。特に目立つのは、マタイによる福音書の山上の説教と(マタ 5: 4,

¹ 旧約・ユダヤ教におけるマカリズム(幸いの宣言)の特色については、原口尚彰「4Q185/4Q525における幸いの宣言」『教会と神学』第42号(2006年)41-68頁を参照。

² 使 26: 2; I テモ 1: 11; 6: 15; テト 2: 13 にも形容詞 μακάριος は使用されているが、マカリズム(幸いの宣言)という文学形式を採っていない。

5, 6, 7, 8, 9, 10, 11), ルカによる福音書中の平野の説教と (ルカ 6: 20, 21, 22), 黙示録における集中的使用であり, 詳しい分析を必要としている³。

他方, マカリズム (幸いの宣言) という文学形式は, 新約聖書に留まらず使徒教父文書にも広範に使用されている (ディダケー 1: 5; バルナバ 10.10; 11.8; Iクレ 35.1; 44.5; 48.4; 50.5, 6; 56.6; IIクレ 16.4; 19.3; イグ・フィラ 10.2; ポリュ・フィラ 2.3; 12.1; ヘルマス「幻」1.1.2; 2.2.7; 「戒め」8.9; 「喩え」2.10; 5.3.9; 6.1.1; 9.29.3; 9.30.3)。特に, クレメンスの第一の手紙やヘルマスの牧者はこの文学形式を頻繁に用いている (Iクレ 35.1; 40.4; 43.1; 44.5; 47.1; 48.4; 50.5, 6; 56.6; ヘルマス「幻」1.1.2; 2.2.7; 「戒め」8.9; 「喩え」2.10; 5.3.9; 6.1.1; 9.24.2; 9.29.3; 9.30.3)。

従来の研究は山上の説教中と平野の説教に出て来るマカリズム (幸いの宣言) に集中しており, 初期キリスト教全般におけるマカリズム (幸いの宣言) の神学的・文学的位置付けは十分になされていないし, その修辭的機能についての研究も十分ではなかった⁴。筆者は, 予備的

³ 詳細は, 原口尚彰「ルカ文書におけるマカリズム:幸いの宣言と物語的文脈」『教会と神学』第46号(2008年)1-34頁; 同「Q資料におけるマカリズム(幸いの宣言)」『新約学研究』第36号(2008年)4-15頁; 同「マタイによる福音書におけるマカリズム(幸いの宣言)」『教会と神学』第47号(2008年)57-95頁を参照。

⁴ J. Dupont, *Les Béatitudes* (3 vols; Paris: Gabalda, 1958-73); H. Frankmölle, "Die Makarismen," *BZ* 15 (1971) 54-55; S. Schulz, *Q. Die Spruchquelle der Evangelisten* (Zürich: Theologischer Verlag, 1972) 76-84; R. Guelich, "The Matthean Beatitudes: 'Entrance Requirements' or Eschatological Blessings?," *JBL* 95 (1976) 415-434; G. Strecker, *Die Bergpredigt. Ein exegetischer Kommentar* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984) 28-49; I. Broer, *Die Seligpreisungen der Bergpredigt* (Königstein / Bonn: Hanstein, 1986); M. Sato, *Q und Prophetie* (WUNT 2/29; Tübingen: Mohr, 1988) 247-264; J. Kloppenborg, *The Formation of Q* (Philadelphia: Fortress, 1988) 172-173; U. Luz, *Das Evangelium nach Matthäus (Mt 1-7)* (2. Aufl.; Neukirchener-Verlag; Neukirchener Verlag, 2002) 267-294.

作業として、旧約・ユダヤ教におけるマカリズム（幸いの宣言）の使用例を個々に検討し、主要な特色を確認した後に、新約聖書と使徒教父文書におけるマカリズム（幸いの宣言）のすべてを積義的に分析し、その神学的・文学的機能を明らかにすることに努めて来た⁵。今回は、これまで行って来た文献学的な検討結果を総括し、初期キリスト教のマカリズムの全体像を示し、その神学的・修辭的特色の輪郭を示すことを目指している。

2. 活ける宗教の言葉としてのマカリズム（幸いの宣言）

マカリズムという文学形式は、旧約・ユダヤ教や初期キリスト教のみならず、周辺世界を構成するギリシア・ローマ世界においても広範に用いられていた。ギリシア・ローマ世界においては、幸いの観念を表現するために、μακάριος（または、その別形 μάκαρ），或いは、類義

⁵ 原口尚彰「4Q185/4Q525における幸いの宣言」『教会と神学』第42号（2006年）41-68頁；同「黙示録における幸いの宣言」『新約学研究』第35号（2007年）48-62頁；同「使徒教父文書における幸いの宣言」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第25号（2007年）33-48頁；同「アレクサンドリアのフィロンの幸福理解」『教会と神学』第45号（2007年）21-36頁；同「ルカ文書におけるマカリズム：幸いの宣言と物語的文脈」『教会と神学』第46号（2008年）1-34頁；同「Q資料におけるマカリズム（幸いの宣言）」『新約学研究』第36号（2008年）4-15頁；同「マタイによる福音書におけるマカリズム（幸いの宣言）」『教会と神学』第47号（2008年）57-95頁；「パウロにおけるマカリズム（幸いの宣言/幸福論）」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第27号（2009年）29-44頁；「ヨハネによる福音書におけるマカリズム（幸いの宣言）」青山学院基督教会・同窓会編『基督教論集』第53号（2010年）48-62頁；「Iペトロ書におけるマカリズム（幸いの宣言）」『ルーテル学院大学紀要（テオロギア・ディアコニア）』第42号（2010年）47-54頁；「ヤコブ書におけるマカリズム（幸いの宣言）」『ヨーロッパ文化史研究』第11号（2010年）109-130頁を参照。

の ὄλβιος や εὐδαίμων が用いられる⁶。形容詞の μακάριος/μάκαρ は、本来は神々の形容に用いられ、苦難や死の運命を超えた至福な状態を表す（ホメロス『イリアス』1.339；『オデュッセイア』10.299；14.83-84；18.425-426；ヘシオドス『神統記』33；『労働と日々』136, 139；141-142；170-171；826；ピンダロス『オリンピア頌歌』1.52；プラトン『ティマイオス』90c 他）。他方、この形容詞は、幸運に恵まれた卓越した個人についても適用される（ホメロス『イリアス』3.182；11.68；16.595；『オデュッセイア』5.7；6.154-155；ヘシオドス『神統記』954-955；ピンダロス『ピトニア頌歌』4.59；5.20；プラトン『法律』12.669e 他）。この言葉が表す幸福の度合いは、形容詞 εὐδαίμων よりも高く、人間が到達しうる最高の至福の形容と言える。

Μακάριος ὅς 或いは, ὄλβιος ὅς というマカリズム（幸いの宣言）の文学形式は、讃歌や頌歌等の詩文の中に見られ、非常に高揚した賞賛の言葉として機能している（『デーメータールのホメロス風讃歌』480-483；ホメロス『オデュッセイア』24.182；ピンダロス『オリンピア頌歌』7.11；バッキリデス『頌歌』5.50 他）。この定式はしばしば、ギリシア・ローマ世界の密儀宗教の祭儀において、神々にまみえる秘儀に参加して、霊的な死と再生の体験を経た入信者に幸いを宣言するという文脈で使用されたと推定される⁷。密儀宗教の儀式は秘儀であり、外部者に対して秘密にされ、口頭で祭司や信者たちの間に伝えら

⁶ LSJ 1073；F. Hauck / G. Bertram, “μακάριος κτλ,” *ThWNT* 4.365-373 を参照。

⁷ B. Gladigow, “Zum Makarismos des Weisen,” *Hermes* 95 (1967) 404-433；H.D. Betz, *Essays on the Sermon on the Mount* (Philadelphia: Fortress, 1985) 30-33 (以下, *Essays* と略記)；idem., *The Sermon on the Mount* (Minneapolis: Fortress, 1995) 93-97 (以下, *Sermon* と略記)。

れたので、その祭儀文本文は残存しないが、その中で使用されたマカリズムは、様々な文書に言及されており、間接的な形で知ることが出来る。例えば、『デーメーテルへのホメロス風讃歌』480-483は、エレウシスで行われていた女神デーメーテルへ捧げる祭儀に与る者の幸いを、ὄλβιος ὃς τάδ' ὄπωπεν ἐπιχθονίων ἀνθρώπων（幸いである、地上の人間たちの中でこれらのことを見た者は）と述べる。エウリピデス『バックスの信女』72-77は、ディオニソスの祭儀に参加する者の幸いを，ὦ μάκαρ ὅστις εὐδαίμων τελετὰς θεῶν εἰδὼς βιοτὰν ἀγιστεύει καὶ θιασεύεται ψυχάν（嗚呼、幸いであり、幸福である者は、神々の秘儀を知って生活を聖化し、魂を捧げている）と述べる。密儀に与ることを視覚的体験として把握した上で、幸いを宣言している点において両者の内容は相互に類似している（ピンダロス『断片』121も参照）。

このことは、幸いに到る道として様々な宗教思想や倫理想が自己を提示し、競い合う古代世界の状況を映し出している。宗教は神の真実を語り、人々を救いに導くが、そのことは人間を幸いに到らせる道として表現され、受容されたのである。尚、初期ユダヤ教や初期キリスト教のマカリズムは人々に対して幸いを宣言し、また、幸いに与るように勧めるという共通の目的を持っていたが、内容的にはそれぞれのマカリズムはそれを形成し、担った集団の宗教観を反映してそれぞれ他とは異なる特色を備えていた⁸。初期ユダヤ教や初期キリスト教のマカリズムは、それぞれのマカリズムはそれを形成し、担った集団の宗教観を反映してそれぞれ他とは異なる特色を備えている。例えば、

⁸ この点については、特に「マタイによる福音書におけるマカリズム（幸いの宣言）」『教会と神学』第47号（2008年）57-95頁を参照。

マタ 16: 17 おいてペトロに対し語られているマカリズムは、マタイ共同体が持つキリスト論的認識の正当性を正統ユダヤ教に対して主張する意味がある。これとは対照的に、グノーシス派が生み出したマリアによる福音書やバルトロマイによる福音書のマカリズムは（マリ福 10: 14-15；バル福 1: 8）、キリスト教内の正統教会に対して非正統のグループが自分たちの信仰理解の正当性を主張している。特に、マリアによる福音書は、ペトロとマグダラのマリアを弟子たちの中で競合する関係として捉え、ペトロではなくマリアの方にマカリズムが語られたとする。マカリズムという文学形式を援用して自分たちのグループの信仰認識の正当性を主張することにおいて両者は一致しているが、特別な啓示の受領者を誰とするかということでマタイ福音書と非正統なグループとの態度が分かれているのである。

初期キリスト教は旧約・ユダヤ教から継受したマカリズム（幸いの宣言）という文学形式を用いるにあたっては非常に柔軟であり、修辭的目的に合わせて、異なった人称や多様な文体を展開している。このことは、マカリズムが初期のキリスト教において、活ける宗教の言葉として形成発展したことを示している。初期キリスト教は旧約・ユダヤ教の文学的伝統に立ちながら、古い文学形式に新しい思想的息吹を吹き込んだのであった。

3. 知恵文学的性格と黙示文学的性格

マカリズム（幸いの宣言）は、箴言や（箴 3: 13； 8: 32-34； 14: 21； 16: 20； 20: 7； 28: 14； 29: 18； 31: 28）、詩編（詩 1: 1； 2: 12；

32: 1-2; 41: 2; 65: 5; 84: 5-6; 106: 3; 112: 1; 119: 1-2; 127: 5; 128: 1-2; 137: 8-9; 144: 15) に多く使用され、旧約聖書の知恵文学に由来する文学形式である。箴言の書に収録されている格言の多くは知恵の獲得と伝授ということを主題としており、אשרי 定式と親和性が強い（箴3: 13-14; 8: 32-34 参照）。箴3: 13は、「知恵を見出す人、また理解に達する人」が幸いであると述べる。知恵を得る人に幸福が約束されることは、人々が知恵を得ようとする内的動機付けを与える効果を持つ。箴8: 32-34では、知恵に耳を傾けるように勧める言葉とマカリズムが交互に出て来る。詩119: 1-3はこの長大な知恵の詩編の文頭にあって表題的な機能を果たしており、トーラー（律法）に示された道に歩む人々の幸いを客観的・一般的に宣言するのに対して、4節以下の部分はトーラーの戒めを守る者自身の立場から主体的な態度を表明している⁹。ここでは知恵の獲得の手段が、自然の観察や人生経験ではなく、トーラー（律法）の学習となっている。神の意思の啓示の書であるトーラーを学ぶ律法学者が、知者と同視されていく過程をここに見ることが出来る。

他方、旧約・ユダヤ教のマカリズムには、預言書や黙示的文書にも使用されている例がある。預言書ではイザヤ書とダニエル書にマカリズムの使用例がある（イザ30: 18; 32: 20; 56: 2; ダニ12: 12）。イザ56: 1-2では、「正義を守り、義を行いなさい。」（56: 1a）という勧めの言葉に続いて、救いが近付き、神の義がまもなく顕されるといふ約束の言葉が語られた上で、義を行う者の幸いが語られている。

⁹ 知恵の詩編の中でも、詩1; 112; 119; 128 他は特に「トーラー詩編」と呼ばれている。Käser, 242; J.T. Limburg, "Psalms, Book of," ABD 5.532-534 を参照。

マカリズムが勧告と結合する点は、箴8：32-34の用例に並行するが、まもなく顕される神の義という終末的視点が語られる点は新しい展開である。終末的視点は、イザ30：16や32：20にも認められる。ダニ12：12ではマカリズムが、黙示的文書であるダニエル書の結びに置かれている。文書に締め括りを与える機能は、詩編における幸いの宣言の用法の継承である。12章は終末時における大天使ミカエルの来臨と、その時に命の書に名が記されている義人に与えられる究極の救いを描いている（ダニ12：1-3）。ここで約束されている幸福は、知恵文学が語る繁栄や成功といった地上的幸福ではなく、終末時に与えられる祝福である。終末的視点が優越し、地上的幸福観を逆転させている点はマカリズムの新しい展開である。

ユダヤ教黙示文学におけるマカリズムの使用例は、エチ・エノ58：2；81：4；82：4；スラ・エノ42：6-14；52：1-15；モーセ昇10：8に見られる。エチオピア語のエノク書において、マカリズムは三度使用されている（58：2；81：4；82：4）。このマカリズムは、命の書に記された義人の死後の運命について幸いであると述べている。マカリズムが彼岸的な領域に移されているのは（58：2；82：4も同様）、黙示文学によるこの文学形式の用例の特色であろう。

新約聖書中のマカリズムは、知恵文学的な性格のもの（マタ5：4，5，6，7，8，9，10，11；11：6；13：16；16：17；24：46；ルカ1：45；6：20，21，22；7：23；10：23；11：27，28；12：37，38；14：14，15；23：29；ヨハ13：17；20：29；使20：35；26：2；ロマ4：7，8；14：22；Iコリ7：40；Iテモ1：11；6：15；テト2：13；ヤコ1：12，25），黙示的性格のものに大別される（Iペト3：14；4：14；

黙 1: 3; 14: 13; 16: 15; 19: 9; 20: 6; 22: 7, 14)。

但し、イエスの山上の説教中のマカリズムと（マタ 5: 3-12）平野の説教中のマカリズムは（ルカ 6: 20-23），知恵文学的要素の上に黙示的要素を重ね合わせている。Q 資料が保存するいくつかのマカリズムは（Q6: 20-23; 12: 43），現在における幸いを宣言する点において知恵文学的マカリズムの伝統に立っているが，終末時の運命を幸いの根拠として挙げる点において黙示文学的である。Q 資料において知恵文学的要素と黙示的要素が相互に排他的ではなく，有機的に結合している¹⁰。このことは，Q 資料の描くイエス像が知恵の教師と預言者の両面を併せ持つことに対応している。それは Q 教団の宣教者の語り方が，知恵文学的であると共に預言者的でもあったことに重なる。

ヤコブ書は全体として知恵への指向が強い¹¹。著者は自ら教師を任じ（ヤコ 3: 1），読者に知恵を祈り求めるように勧めている（1: 5）。知者はその知恵を柔和な行いという生き方によって示さなければならぬ（3: 13）。上からの知恵は穏和や優しさや従順や哀れみといった

¹⁰ 原口尚彰「Q 資料におけるマカリズム（幸いの宣言）」『新約学研究』第 36 号（2008 年）4-15 頁を参照。

¹¹ ヤコブ書の知恵文学的性格については，M. Dibelius, *Der Brief des Jakobus* (KEK; 11. Aufl.; hrsg. v. H. Greeven; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1964) 152; U. Luck, "Weisheit und Leiden. Zum Problem des Paulus und Jakobus," *ThLZ* 92 (1967) 253-258; B.R. Halson, "The Epistle of James: 'Christian Wisdom?'," *Studia Evangelica IV* (Berlin: Akademie, 1968) 308-314; E. Baasland, "Jakobusbrief als neutestamentliche Weisheitsschrift," *StTh* 36 (1982) 119-139; R. Hoppe, *Der theologische Hintergrund des Jakobusbriefes* (Würzburg: Echter, 1977); H. Frankemölle, "Zum Thema des Jakobusbriefes im Kontext der Rezeption von Sir 2,1-18 und 15,11-20," *BN* 48 (1989) 21-49; L.T. Johnson, "Reading Wisdom Wisely," *Louvain Studies* 28 (2003) 99-112; R.J. Bauckham, "The Wisdom of James and the Wisdom of Jesus," in *The Catholic Epistles and the Tradition* (ed. J. Schlosser; Leuven: Leuven University Press, 2004) 75-92; D. Lockett, "The Spectrum of Wisdom and Eschatology in the Epistle of James and 4Q Instruction," *Tyn Bul* 56 (2005) 131-148 を参照。

善行の実を結ぶことになる（3：17-18）。この文書の二つのマカリズムが語る、試練を耐え忍ぶ者の幸いや（1：12）、御言葉を行う者の幸いも（2：25）、主から与えられる上からの知恵の一環をなしていると考えられる。ヤコブ書は全体が黙示文学の文学形式によって書かれているとは言えないが、一部（1：12；5：7-11）に黙示的要素を含んでいる¹²。同様な例は、所謂小黙示録（マコ 13：1-37）を含むマルコによる福音書や、キリストの来臨の場面を描く部分（Iテサ 4：13-5：11）を含むIテサロニケ書に見られる。ヤコブ書の著者は、「主の来臨は近づいた」という確信を持っており（5：8）、主の来臨を待ち望みながら、現在の苦難を忍耐するように勧めている（5：7-11）¹³。主の来臨の時は審判が行われる時であり、審判者として主はやってくる想定されている。試練を最後まで耐え忍ぶ者に対して幸いを宣言することは、聞く者の幸福に対する希求に訴えて、現在の苦難を耐え忍ぶ内的動機を与える（1：12；5：11）。知恵文学的なマカリズムがここでは黙示的主題を補強する役割を果たしていると言える¹⁴。

黙示的マカリズム（幸いの宣言）が集中的出て来るのは黙示録であるが、この文書におけるマカリズムは、キリストの来臨に備えたマカリズムと（黙 1：3；16：15；22：7）、地上でキリスト教信仰に忠実

¹² H. Frankemölle, *Der Brief des Jakobus* (GTB 517; ÖTKKNT 17/1-2; Güterlshoh: Güterlshoher Verlagshaus; Würzburg: Echter, 1994) 1.264.

¹³ F. Mußner, *Der Jakobusbrief* (3. erweiterte Aufl.; Freiburg: Herder, 1975) 207-211; Hartin, 34-35; T.C. Penner, *The Epistle of James and Eschatology: Re-reading an Ancient Christian Letter* (JSNTS 121; Sheffield: Sheffield Academic Press, 1996) は、終末論的思考がヤコブ書全体に貫かれていると見る。

¹⁴ Frankemölle, 1.261 はヤコ 1：12 が形式的には黙示文学的だが、内容的には知恵文学的であると論じる。しかし、ヤコ 1：12 は形式的にも内容的にも黙示文学的である。知恵文学的要素と黙示文学的要素は相互に排他的であるとは限らず、両者が結合する場合もある。

に歩んだために殉教した人々に対してなされる天上のマカリズム（14：13；19：9；20：6；22：14）に内容上大別される。前者の系列のマカリズムは、キリストの来臨に相応しい備えすることを勧める目的を持つ（黙1：3；16：15；22：7）。なかでも、黙1：3は、黙示録の文章を朗読する人と朗読された言葉を聞いて書かれていることを守る人の幸いが宣言され、文学作品としての黙示録への誘いの言葉となっている¹⁵。

黙示録に出て来る信仰のうちに世を去った死者の死後の幸いを告げるマカリズムは（黙14：13；19：9；20：6）、ユダヤ教黙示文学のマカリズムに非常に近い関係にある。黙示録の著者は、時が迫っているという強い終末意識の下に（1：3）、二つの違ったタイプのマカリズムを使い分け、黙示の言葉を注意深く聞いて守ることを勧めると共に（黙1：3；22：7）、迫害の状況下で殉教者が出る中で、小アジアの教会の人々に来るべき世界の勝利と祝福を告げて励まそうとしたと考えられる¹⁶。

4. 演示的機能と助言的機能

マカリズム（幸いの宣言）の修辭的機能について言えば、特定の状態や態度を幸いと宣言することは、基本的には一定の徳を称賛することを通して共同体の価値観を確認する演示的機能を果たしている

¹⁵ 原口尚彰「黙示録における幸いの宣言」『新約学研究』第35号（2007年）48-62頁を参照。

¹⁶ 同，48-62頁。

(アリストテレス『弁論術』1358b；キケロ『発想論』1.5.7；『弁論家について』1.6.22；1.31.141；偽キケロ『ヘレンニウスに与える修辞学書』1.2.2；クウィンティリアヌス『弁論家の教育』3.4.1-16)。しかし、特定の状態または態度を称賛することは、聴衆がそうした状態に達することや態度をとること勧める助言的機能を結果として黙示的に持つのであるから、演示的機能は助言的機能を排除しない¹⁷。場合によっては、マカリズムの助言的機能が強化されることもある。

共観福音書において、マカリズムは演示的機能を果たしている。それらは特定の人々に対して、彼らの置かれた経済的または精神的状態の故に（マタ5：3-6；ルカ6：20-22）、或いは、彼らの姿勢の故に（マタ5：7-9）、さらには、義のために迫害されている故に（マタ5：10、11-12；ルカ6：23）、幸いであると告げている。但し、演示的機能は助言的機能を排除せず、マカリズムは幸いな状態への招きを暗示している。Q資料におけるマカリズムも（Q6：20-23；7：23；10：23；12：43）、助言的機能を結果として内包する。特に、Q12：43の場合は、相応しい備えをして来るべき終末を迎える者の幸いを語っており、助言的・勧告的要素を強く帯びている。

これに対して、使徒教父文書のマカリズムは、幸いな状態に達するためには、示されている倫理的基準を満たすように読者に促している（デイダケー1.5；バルナバ1.2；10.10；11：8；Iクレ40.4；48.4；IIクレ16：4；19：3,4；イグ・フィラ10.2；ポリュ・フィラ2.3；11.3；12.1；ヘルマス「幻」3.3.3；3.8.4；「戒め」8.9；「喩え」2.10；5.1.3；

¹⁷ K. Berger, *Formgeschichte des Neuen Testaments* (Heidelberg: Quelle & Meyer, 1984) 188-194 は、幸いの宣言を「助言的類型」に分類している。

5.3.9; 6.1.1; 9.24.2; 9.29.3; 9.30.3)。使徒教父文書の幸いの宣言は、全体的に見て倫理的勧告の性格を強く持っており、修辞学的に言えば、演示的機能よりも、助言的機能を果たしていると言える¹⁸。

5. 物語的文脈におけるマカリズム（幸いの宣言）

マタイによる福音書とルカによる福音書は、Q資料やそれぞれの特殊資料に含まれていた個々のマカリズムを、新たな物語的文脈に置くことによって文学的効果と新たな意味付けを創り出している。ルカによる福音書の物語的文脈においては、イエスがマカリズムを告げるのに加えて（ルカ 6: 20, 21, 22; 7: 23; 10: 23; 11: 28; 12: 37, 38, 43; 14: 14; 23: 29）、他の登場人物がマリアや（ルカ 1: 45; 11: 27）イエスに（ルカ 1: 45）に対する讃辞として、マカリズムを語る¹⁹。これに対して、マタイによる福音書においてマカリズムを告げるのはイエスに限られる（マタ 5: 3-12; 11: 6; 13: 16; 16: 17; 24: 46）。しかも、洗礼者の使者に対して、καὶ μακάριός ἐστιν ὃς ἐὰν μὴ σκανδαλισθῆ ἐν ἐμοί（そして、幸いである、私に躓かない者は。）と述べられる例外的事例を除いて（11: 6）、マカリズムが直接に向けられる相手は専らイエスの弟子たちである（5: 3-12; 13: 16; 16: 17; 24: 46）。マタイによる福音書におけるマカリズムは、教育的対話の中で示された

¹⁸ 原口尚彰「使徒教父文書における幸いの宣言」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第25号（2007年）33-48頁を参照。

¹⁹ 原口尚彰「ルカによる福音書におけるマカリズム：幸いの宣言と物語的文脈」『教会と神学』第46号（2008年）1-35頁を参照。

イエスによる弟子たちに対する啓示の言葉という性格が強い²⁰。

6. マカリズム（幸いの宣言）と認識論

マタイによる福音書とヨハネによる福音書に登場するマカリズムは認識論的契機を内包している。両福音書においてマカリズムを語るのは、専らイエスであるので、両福音書におけるマカリズムには啓示の言葉の性格が強い。

マタイにおけるマカリズムの一部が、イエスのメシア性について特別な認識を与えられていることや（16：17）、開示された天国の奥義を理解する能力を与えられていることの幸いに言及していることは（マタ 13：16）、この福音書の幸い理解の主知側面を示している。マタイによる福音書において弟子たちは、イエスに従う者であると共に（4：20, 22；8：22；9：9, 19；10：38；16：24；19：21, 27-28）、イエスの教えを聞き（5：1-2；13：16, 18）、実践する者である（7：24-27）。イエスの教えを実践する前提として正しい理解が必要であるが、理解はイエスの言葉を聞くことから自動的に与えられるのではない。弟子たちはイエスとの教育的対話の過程を経て、より深い理解に到るのである（13：36-51；16：9-12；17：10-13）²¹。天国の奥義を理解するためには、彼ら自身の自発的問いとそれに答えるイエスの啓示の言葉が必要である。

²⁰ 原口尚彰「マタイによる福音書におけるマカリズム（幸いの宣言）」『教会と神学』第47号（2008年）57-95頁を参照。

²¹ U. Luz, “Die Jünger im Matthäusevangelium,” ZNW 62 (1971) 149 は、この点を強調する。

ヨハネによる福音書において、マカリズムは後半の2箇所（ヨハ 13：7；20：29）に出て来る。ヨハネによる福音書においてマカリズムが語られる相手は、イエスの弟子たち（ヨハ 13：7）、または、弟子の一人であるトマス（20：29）である。ヨハネによる福音書におけるマカリズムは、マタイによる福音書における場合と同様に、教育的対話の中で示されたイエスによる弟子たちに対する啓示の言葉という性格が強く、重要な意味を持っている。ヨハ 20：29b は、 ἴτε ἐώρακάς με πεπίστευκας；（私を見たから信じたのか？）という 20：29a の問いに対してそれを肯定するトマスの回答を予想しつつ、その正反對の原理を、 μακάριοι οἱ μὴ ἰδόντες καὶ πιστεύσαντες（幸いである、見ないで信じる者たちは）というマカリズムの形で一般的に述べている。初期キリスト教において、信仰は宣教の言葉を聞くことによるとされる（ヨハ 4：39-42；ロマ 10：17）。使徒後時代に生きる信徒たちには、復活の主を見た者はなく、必然的に「見ないで信じる」立場にあった（I ペト 1：8）。見ないで信じることの幸いを説くヨハ 20：29b の文言は、使徒後時代の信徒であるヨハネ共同体に属する者たちに特に妥当する原理的立場を表明するものであった²²。

²² 原口尚彰「ヨハネによる福音書におけるマカリズム（幸いの宣言）」青山学院基督教学会・同窓会編『基督教論集』第53号（2010年）48-62頁を参照。

7. 結論：

新約聖書のマカリズム（幸いの宣言）の到達点 マカリズム（幸いの宣言）と哲学的・神学的幸福論

幸福論は古典古代の倫理思想にとり重要な主題であり、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』は著作全体が、善と徳と幸福の概念の分析にあてられている。アリストテレスによれば、幸福（εὐδαιμονία）ということは、より上位の目的を持たない最高善であり、それ自体が人生の究極目的である（『ニコマコス倫理学』1094a-1095a）。ギリシアの倫理思想は、如何にして善く生きるかについての教説であると同時に、如何にして真の幸福に到るかについての教説であったと言える（『ニコマコス倫理学』1094a-1095a；1097b-1098aを参照）。フィロンはギリシア・ローマ世界に生きるユダヤ教思想家として、ヘレニズムの哲学や倫理思想の概念を通して、旧約聖書の箇所を再解釈し、ユダヤ教が信頼するに足る宗教であることをヘレニズム世界の知識層に対して示そうとした²³。フィロンの幸福論は旧約・ユダヤ教に由来する幸いの宣言の伝統と、ギリシア哲学に由来する理論的考察が結合したものであり、彼はユダヤ教こそが人が真に幸いになる道であることを哲学的考察によって提示しようとしたのである。フィロンは、アブラハムを读者である周辺世界の知識人たちが慣れ親しんでいるプラトン哲学を援用しながら、理性によって見えざる実在の世界を認識する幸いな賢人として解釈したのであった。フィロンの思考は聖書解釈にお

²³ P. Borgen, "Philo of Alexandria," *ABD* 5.337-339; idem., *Philo of Alexandria: An Exegete for his Time* (Leiden: Brill, 1997) を参照。

いても哲学的であり、その幸福論も哲学的な性格を持つに到った²⁴。

これに対して、パウロは名詞 μακαρισμός を使用するにあたって（ロマ 4: 6, 9; ガラ 4: 15）、マカリズムという概念についての独自の神学的幸福論を展開しており、新約聖書のマカリズム理解について貴重な資料を提供している。パウロによれば、父祖アブラハムに見られるように、行いによらず信仰によって義とされた者こそが（創 15: 6）、詩編 32 編が述べるように幸いなのである（ロマ 4: 6-8）。パウロの出自はタルソス出身のユダヤ人であり（使 11: 25; 22: 3）、彼はファリサイ派からキリスト教に転じた宣教者であった（使 26: 5; フィリ 3: 5-11）。ローマ書におけるパウロの課題は実践的であり、将来のスペイン伝道についてのローマ教会の協力を得るために（ロマ 16: 14-24）、自らが宣べ伝えている信仰による義を内容とする福音の真理性をローマの信徒たちに対して説くことにあった（1: 16-17; 3: 1-38）²⁵。パウロは旧約・ユダヤ教の信仰的遺産の継承については、選択的な態度を採り、シナイ山の上で与えられたシナイ契約（出 20: 1-24:）に対しては律法の付与として、福音と対立させて考える（ロマ 3: 20-21; 10: 4 他を参照）。これに対して、父祖アブラハムに与えられた約束を、イエス・キリストの福音の予表として、パウロは積極的に評価する。パウロの理解によれば、アブラハムに対する約束は、信仰による義に基づいてなされたのであり（4: 13）、アブラハムは信仰者の父祖であることになる（4: 12）。アブラハムが信仰に

²⁴ フィロンの幸福理解について、詳しくは、原口尚彰「アレクサンドリアのフィロンの幸福理解」『教会と神学』第 45 号（2007 年）21-36 頁を参照。

²⁵ 原口尚彰「パウロにおけるマカリズム（幸いの宣言/幸福論）」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第 27 号（2009 年）29-44 頁を参照。

よって義とされた幸いに与るのならば、彼の信仰の足跡に従う信仰者も幸いに与る希望が与えられるのである。パウロは自分が説く福音の真理性を示すと同時に、読者であるローマの信徒たちに対して、アブラハムを模範として、信仰によって義とされ、幸いに到るように勧めたのである。こうして、パウロの説く幸福論は、哲学的な概念を用いず、聖書的な根拠に基づいた神学的幸福論となった。パウロはアブラハムを信仰の人として解釈し、この族長を信じることによって幸いに到達した人の典型として提示したのに対し（ロマ4:7,8）、フィロンはアブラハムを永遠の世界を理性によって認識する、幸いな知者として提示した。この二つの幸福論の違いは、二人の思想家の生きていた世界の違いと二人が直面していた修辭的状况の違いに帰せられるのである。

文 献 表

1. 一次史料

- K. Aland/B. Aland. *Novum Testamentum* (27. revidierte Aufl.; Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1993).
- Elliger, K./W. Rudolph. *Biblia Hebraica Stuttgartensia*. (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1967-77).
- Bihlmeyer, K. *Die Apostolischen Väter* (ed. W. Schneemecher; 3rd ed; Tübingen: Mohr, 1956).
- L. Cohn/P. Wendland. *Philonis Alexadrini opera quae supersunt* (ed.; Berlin: de Gruyter, 1962).
- Ehrman, B.D. ed. *The Apostolic Fathers* (2vols; LCC 24-25; London/Cambridge, MA: Harvard University Press, 2003).
- Fischer, J.A. *Schriften des Urchristentums* (4 Bde; Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1964-98).

- Lindemann, A./H. Paulsen. *Die Apostolischen Väter* (Tübingen : Mohr, 1992).
 Martines, F.G./E.J.C. Tigchelaar. *The Dead Sea Scrolls* (2 vols ; Kleiden ; Brill, 1997).
 Puech, E. *Qumrân Grotte 4 VIII* (DJD 25 ; Oxford : Clarendon, 1998).
 Rahlfs, A. *Septuaginta* (editio minor, duo volumina in uno ; Stuttgart : Deutsche Bibelgesellschaft, 1935).

2. 個別研究

マカリズム（幸いの宣言）全般

- Cazelles, H. “אשרי,” *ThWAT* 1.481-485.
 Charlesworth, J.H. “The Qumran Beatitudes (4Q525) and the New Testament (Mt 5 : 3-11, Lk 6 : 20-26),” *RHPR* 80 (2000) 13-35.
 Dormeyer, D. “Beatitudes and Mysteries,” in *Ancient and Modern Perspectives on the Bible and Culture* (ed. A. Yarbo Collins ; Atlanta : Scholars Press, 1998) 345-357.
 Dupont, J. *Les Béatitudes* (3 vols ; Paris : Gabalda, 1958-73).
 Fabry, H.J. “Die Seligpreisungen in der Bibel und in Qumran,” in *The Wisdom Texts from Qumran and the Development of Sapiential Thought* (eds. C. Hempel/A. Large/H. Lichtenberger ; Leuven : University Press, 2002) 189-200.
 Fischer, I. “Bestätigung geglückten Lebens — Seligpreisungen im Alten Testament,” *Theologisch — praktische Quartalschrift* 142 (1994) 57-62.
 Fitzmyer, J.A. “A Palesitnian Jewish Collection of Beatitudes,” idem., *The Dead Sea Scrolls and Christian Origins* (Grand Rapids : Eerdmans, 1992) 111-118.
 Frankmölle, H. “Die Makarismen,” *BZ* 15 (1971) 54-55.
 原口尚彰「4Q185/4Q525 における幸いの宣言」『教会と神学』第 42 号 (2006 年) 41-68 頁
 同「アレクサンドリアのフィロンの幸福理解」『教会と神学』第 45 号 (2007 年) 21-36 頁
 Hauck F/G. Bertram, “μακάριος κτλ.,” *ThWNT* 4.365-373.
 Hellholm, D. “Beatitudes and their Illocutionary Functions,” *Ancient and Modern Perspectives on the Bible and Culture* (ed. A. Yarbo Collins ; Atlanta : Scholars Press, 1998) 284-334.
 Janzen, W. “Asrê in the Old Testament,” *HTHR* 58 (1965) 215-226.

- Käiser, W. “Beobachtungen zum alttestamentlichen Makarismus,” *ZAW* 82 (1970) 225-250.
- Limburg, J. T. “Psalms, Book of,” *ABD* 5.532-534.
- Puech, E. “4Q525 et les péripécopes des Béatitudes en Ben Sira et Matthieu,” *RB* 98 (1991) 80-106.

Q 資料関係

- Allison, D.C. Jr., *The Jesus Traditions in Q* (Harrisburg, PA : Trinity Press International, 1997).
- Catchpole, D.R. *The Quest for Q* (Edinburgh : T & T Clark, 1993).
- Fleddermann, H.T. *Q : A Reconstruction and Commentary* (Leuven : Peeters, 2005).
- 原口尚彰「Q 資料におけるマカリズム (幸いの宣言)」『新約学研究』第 36 号 (2008 年) 48-62 頁
- Hoffmann, P. *Studien zur Theologie der Logienquelle* (Münster : Achendorff, 1975).
- Hoffmann, P./C. Heil. eds. *Die Spruchquelle Q* (Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft ; Leuven : Peeters, 2002).
- Hüneburg, M. *Jesus als Wundertäter in der Logienquelle* (Leipzig : Evangelische Verlagsanstalt, 2001).
- Kloppenborg, J.S. *The Formation of Q* (Philadelphia : Fortress, 1988) 172-173.
 ————. *Excavating Q* (Minneapolis : Fortress, 2000).
- Piper, R.A. *Wisdom in the Q-tradition. The Aphoristic Teaching of Jesus* (MS-SNTS 61 ; Cambridge : Cambridge University Press, 1989).
- Robinson, J.M. “LOGOI SOPHON,” J.M. Robinson/H. Koester, *Trajectories through Early Christianity* (Philadelphia : Fortress, 1971) 71-113.
 ————. “Die Logienquelle : Weisheit oder Prophetie ? Anfragen an Migaku Sato,” *EvTh* 53 (1993) 367-389.
- Robinson, J.M./P. Hoffmann/J.S. Kloppenborg eds. *The Critical Edition of Q* (Minneapolis : Fortress, 2001).
- Sato, M. *Q und Prophetie* (WUNT II. 29 ; Tübingen : Mohr, 1988) 247-254.
 ————. “Q : Weisheit oder Prophetie ? Ein Gespräch mit J.M. Robinson,” *EvTh* 53 (1993) 389-404.
- Schulz, S. *Q. Die Spruchquelle der Evangelisten* (Zürich : Theologischer Verlag, 1972) 76-84.
- Tuckett, C.M. *Q and History of Early Christianity* (Edinburgh : T & T Clark,

1996).

- Vielhauer, P. *Geschichte der urchristlichen Literatur* (Berlin : de Gruyter, 1985).
 Zeller, D. *Kommentar zur Logienquelle* (SKK 21 ; Stuttgart : Katholisches Bibelwerk, 1984).

マタイによる福音書関係

- Becker, H.J. and S. Ruzer (eds.). *The Sermon on the Mount and its Jewish Setting* (CRRB 60 ; Paris : Gabalda, 2005).
 Betz, H.D. *Essays on the Sermon on the Mount* (Philadelphia : Fortress, 1985).
 _____. *The Sermon on the Mount* (Minneapolis : Fortress, 1995).
 Bornkamm, G. “Der Aufbau der Bergpredigt,” *NTS* 24 (1977-78) 419-31.
 Braumann, G. “Zum traditionsgeschichtlichen Problem der Seligpreisungen Mt V 3-12,” *Nov Test* 4 (1960) 253-260.
 Broer, I. *Die Seligpreisungen der Bergpredigt* (Königstein/Bonn : Hanstein, 1986).
 Brooke, G.J. “The Wisdom of Matthew’s Beatitudes (4QBeat and Mt. 5 : 3-12),” *Scripture Bulletin* 19 (1989) 35-41.
 Brown, J.K. “Direct Engagement of the Reader in Matthew’s Discourses : Rhetorical Techniques and Scholarly Consensus,” *NTS* 51 (2005) 19-35.
 Byrskog, S. “Jesus as Messianic Teacher in the Gospel according to Matthew : Tradition History and/or Narrative Christology,” in *The New Testament as Reception* (ed. M.T. Müller and H. Tronier ; JSNTSup 230 ; Sheffield : Sheffield Academic Press, 2002) 83-100.
 Carter, W. and J.P. Heil. *Matthew’s Parables : Audience-Oriented Perspectives* (CBQMS 30 ; Washington, DC : The Catholic Biblical Association of America, 1998).
 Cazelles, H. “אשר,” *ThWAT* 1.481-485.
 Chae, Y.S. *Jesus as the Eschatological Davidic Shepherd : Studies in the Old Testament, Second Temple Judaism, and in the Gospel of Matthew* (WUNT 2/216 ; Tübingen : Mohr, 2006).
 Charlesworth, J.H. “The Qumran Beatitudes (4Q525) and the New Testament (Mt 5 : 3-11, Lk 6 : 20-26),” *RHPR* 80 (2000) 13-35.
 Cronje, S.W. “A Study of the Theological and Ecclesiological Consequences of Jesus’ Pronouncements in Matthew 16 : 18-19 and 18 : 18 concerning Peter as the Rock, the Keys of the Kingdom given to Peter, and the Church as the Holder of the Keys of the Kingdom,” *Acta Patristica et Byzantina* 14

- (2003) 78-96.
- Davies, W.D. *The Setting of the Sermon on the Mount* (Cambridge : Cambridge University Press, 1963).
- Day, C.R. “Those who are Persecuted because of Righteousness. An Examination of the Origin and Meaning of the Eighth Beatitude,” *Acta Patristica et Byzantina* 16 (2005) 157-165.
- Dider, M. (ed.). *L’Evangile selon Matthieu : redaction et théologie* (BETL 29 ; Gembloux : Ducoulot, 1972).
- Dupont, J. “L’ambassade de Jean-Baptiste (Matthieu 11,2-6 ; Luc 7,18-23),” *NRT* 83 (1961) 943-959.
- Eichholz, G. *Auslegung der Bergpredigt* (6. Aufl. ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1984).
- Fabry, H.J. “Die Seligpreisungen in der Bibel und in Qumran,” in *The Wisdom Texts from Qumran and the Development of Sapiential Thought* (eds. C. Hempel/A. Large/H. Lichtenberger ; Leuven : University Press, 2002) 189-200.
- Finley, T.J. “‘Upon this Rock.’ Matthew 16,18 and the Aramaic Evidence,” *Aramaic Studies* 4 (2006) 133-151.
- Finze-Michaelson, H. *Das andere Glück. Die Seligpreisungen Jesu in der Bergpredigt* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 2006).
- Garland, D.E. *The Intention of Matthew 23* (Nov Test 52 ; Leiden : Brill, 1979).
- Gathercole, S.J. *The Preexistent Son : Recovering the Christologies of Matthew, Mark and Luke* (Grand Rapids : Eerdmans, 2006).
- Goodwin, M.J. “Hosea and the ‘Son of the Living God’ in Matthew 16 : 16b,” *CBQ* 67 (2005) 265-283.
- Green, H.B. *MatheW, Poet of the Beatitudes* (JSNTSup 203 ; Sheffield : Sheffield Academic Press, 2001).
- Guelich, R. “The Matthean Beatitudes : ‘Entrance Requirements’ or Eschatological Blessings ?,” *JBL* 95 (1976) 415-434.
- . *The Sermon on the Mount : A Foundation for Understanding* (Waco, TX : Word, 1982).
- Gundry, R.H. *The Old is Better. New Testament Essays in Support of Traditional Interpretation* (WUNT 178 ; Tübingen : Mohr, 2005).
- 原口尚彰「マタイによる福音書におけるマカリズム（幸いの宣言）」『教会と神学』第47号（2008年）57-95頁
- Hengel, M. “Zur matthäischen Bergpredigt und ihrem jüdischen Hintegrund,”

- ThR 52 (1987) 332-341 (= ders., *Judaica, Hellenica et Christianica : Kleine Schriften*. WUNT 109 ; Tübingen : Mohr, 1999, 224-233).
- Jacob, G. “Die Proklamation der messianischen Gemeinde. Zur Auslegung der Makarismen in der Bergpredigt,” *Th V* 12 (1981) 47-75.
- Kähler, C. “Zur Form- und Traditionsgeschichte von Matt. xvi. 17-19,” *NTS* 23 (1977) 36-58.
- Kahmann, J. “Die Verheissung an Petrus,” in Dider, M. (ed.). *L’Evangile selon Matthieu : redaction et théologie* (BETL 29 ; Gembloux : Ducoulot, 1972), 261-80.
- Käser, W. “Beobachtungen zum alttestamentlichen Makarismus,” *ZAW* 82 (1970) 225-250.
- _____. “Exegetische und theologische Erwägungen zur Seligpreisung der Kinderlosen Lc 23,29b,” *ZNW* 54 (1963) 240-254.
- Kingsbury, J.D. “The Figure of Peter as a Theological Problem,” *JBL* 98 (1979) 67-83.
- Klein, P. “Die lukanischen Weherufe Lk 6, 24-26,” *ZNW* 71 (1980) 50-59.
- Kloppenborg, J.S. *The Formation of Q* (Philadelphia : Fortress, 1988) 172-173.
- _____. *Excavating Q* (Minneapolis : Fortress, 2000).
- Köhler, K. “Die ursprünglichen Form der Seligpreisungen,” *TSK* 91 (1918) 157-192.
- Köhler, W.-D. *Die Rezeption des Matthäusevangeliums in der Zeit von Irenäus* (WUNT 2.24 ; Tübingen : Mohr, 1987).
- Kvalbein, H. “The Authorization of Peter in Matthew 16 : 17-19 : A Reconsideration of the Power and Loose,” in *The Formation of the Early Church* (ed. J. Ådna ; WUNT 183 ; Tübingen Mohr, 2005) 145-174.
- Lichtenberger, H. “Makarisms in Matthew 5 : 3ff. in their Jewish context,” in *The Sermon on the Mount and its Jewish Setting* (Becker, H. J. and S. Ruzer (eds.) ; CRRB 60 ; Paris : Gabalda, 2005) 40-56.
- Limburg, J.T. “Psalms, Book of,” *ABD* 5. 532-534.
- Loubser, J.A. “Memory and Oral Aesthetics in Matthew,” *Neot* 40 (2006) 61-86.
- Luz, U. *Das Evangelium nach Matthäus* (4 Bde ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1985-2002).
- _____. “Das Primatwort Matthäus 16.17-19 aus wirkungsgeschichtlicher Sicht,” *NTS* 37 (1991) 415-33.
- _____. “Intertexts in the Gospel of Matthew,” *HTR* 97 (2004) 119-137.
- Lybaek, Lena. *New and Old in Matthew 11-13. Normality in the Development of*

- Three Theological Themes* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 2002).
- McCown, C.C. "The Beatitudes in the Light of Ancient Ideals," *JBL* 46 (1927) 50-61.
- McEleney, N. J. "The Beatitudes of the Sermon on the Mount/Plain," *CBQ* 43 (1981) 1-13.
- Mowery, R.L. "Son of God in Roman Imperial Titles and Matthew," *Bib* 83 (2002) 100-110.
- Neuhäusler, E. "Die Seligpreisungen," in ders., *Anspruch und Antwort Gottes* (Düsseldorf : Patmos, 1962) 141-169.
- Nickelsburg, G.W. E. "Enoch, Levi and Peter : Recipients of Revelation in Upper Galilee," *JBL* 100 (1981) 575-600.
- Niebuhr, K.-W. "Die Seligpreisungen in der Bergpredigt nach Matthäus und im Brief des Jakobus," in *Neutestamentliche Exegese im Dialog* (FS. Ulrich Luz ; hrsg. v. P. Lampe, M. Mayordomo und M. Sato ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 2008) 275-296.
- Olmstead, W.G. *Matthew's Trilogy of Parables. The Nation, the Nations and the Reader in Matthew 21 : 28-22 : 14* (SNTSMS 127 ; Cambridge : Cambridge University Press, 2003).
- Pamment, M. "The Kingdom of God according to the First Gospel," *NTS* 27 (1981) 212-32.
- Powell, M.A. "Matthew's Beatitudes : Reversals and Rewards of the Kingdom," *CBQ* 58 (1996) 460-79.
- Steinhauser, M.-G. "The Beatitudes and Eschatology : Announcing the Kingdom," *Living Light* 19 (1982) 121-129.
- Strecker, G. *Die Bergpredigt. Ein exegetischer Kommentar* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1984).
- _____. "Die Seligpreisungen der Bergpredigt," *NTS* 17 (1971) 255-275.
- Van Aarde, A.G. "IHSOUS, The Davidic Messiah as Political Saviour in Matthew's History," in *Salvation in the New Testament : Perspectives on Soteriology* (ed. J. G. van der Watt ; Leiden : Brill, 2005) 7-31.
- Vögtle, A. "Wunder und Wort in urchristlicher Glaubenswerbung (Mt 11, 2-5 ; Lk 7, 18-23)," in ders., *Evangelium und die Evangelisten* (Düsseldorf : Patmos, 1971) 219-242.
- Walter, N. "Die Bearbeitung der Seligpreisungen durch Matthäus," *Studia Evangelica* (TU 102 ; Berlin : Akademie Verlag, 1968) 246-58.
- Wilcox, M. "Peter and the Rock : A Fresh Look at Matt 16.17-19," *NTS* 22

(1975-76) 75-88.

Zimmerli, W. "Die Seligpreisungen der Bergpredigt und das Alte Testament," in *Domum Gentilicium* (FS. D. Daube ; ed. E. Bammel et al. ; Oxford : Clarendon, 1978) 8-26.

ルカによる福音書関係

荒井献「理念としての『貧者』——福音書・死と行伝記者ルカの『罪人』理解をめぐって」『荒井献著作集3』岩波書店、2001年、259-286頁

Bovon, F. *Das Evangelium nach Lukas* (EKK 3/1-3 ; Zürich : Benzinger/Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1989-2001).

Degenhardt, H.-J. *Lukas-Evangelist der Armen* (Stuttgart : Katholisches Bibelwerk, 1965) 42-57.

Fitzmyer, J.A. *The Gospel according to Luke* (AB28-28A ; New York : Doubleday, 1970-1985).

Gibson, C.H. *The Destruction of Jerusalem* (AnBib 107 ; Rome : Pontifical Biblical Institute, 1985) 93-104.

Grimm, W. "Selige Augenzeugen, Luk. 10, 23f.," *ThZ* 26 (1970) 172-183.

原口尚彰「ルカによる福音書におけるマカリズム（幸いの宣言）：幸いの宣言と物語的文脈」『教会と神学』第46号（2008年）1-34頁

Hoyt, T. "The Poor/Rich Theme in the Beatitudes," *JRT* 37 (1980) 31-41.

Jacquemin, P. E. "Béatitudes selon Sain Luc (Luc 6, 20-26)," *Assemblées du Seigneur* 37 (1971) 80-91.

_____. "L'Accueil de la parole de Dieu Luc 6, 27-28" *Assemblées du Seigneur* 66 (1973) 10-19.

Klein, H. *Das Lukasevangelium* (KEK 1/3 ; Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 2006).

Klein, P. "Die lukanischen Weherufe Lk 6, 24-26," *ZNW* 71 (1980) 50-59.

Neyrey, J.H. "Jesus' Address to the Women of Jerusalem (Lk. 23, 27-31). A Prophetic Judgment Oracle," *NTS* 29 (1983) 74-86.

_____. *The Social World of Luke — Acts* (Peabody, PA : Hendrickson, 1991).

Nickelsburg, G.W.E. "Enoch, Levi and Peter : Recipients of Revelation in Upper Galilee," *JBL* 100 (1981) 575-600.

Mussner, F. "Lk 1,48f. ; 11,27f. und die Anfänge der Marienverehrung in der Urkirche," *Catholica* 21 (1967) 287-294.

Noland, J. *Luke* (WBC 35A-C ; Dallas : Word, 1989-1993).

Riedl, J. "Selig, die das Wort Gottes hören und befolgen (Lc 11,28)," *Bibel und*

- Leben* (1963) 252-260.
- Schmidt, T.E. *Hostility to Wealth in the Synoptic Gospels* (JSNTSup 15; Sheffield: JSOT, 1987).
- Schottroff, L. "Maria Magdalena und die Frauen am Grabe Jesu," *EvTh* 42 (1982) 3-25.
- Schürmann, H. *Das Lukasevangelium* (HThKNT 3/1-2; Freiburg: Herder, 1969-1993).
- Schwarz, G. "Lukas 6, 22a. 23c. 26. Emendation, Rückübersetzung, Interpretation," *ZNW* 66 (1975) 269-274.
- Scott, M.P. "A Note on the Meaning and Translation of Luke 11,28," *ITQ* 41 (1974) 235-250.
- Shelland, B. *New Light on Luke* (JSNTSup 215; Sheffield: Sheffield Academic Press, 2002).
- Soards, M.L. "Tradition, Composition, and Theology in Jesus' A Speech to the Daughters of Jerusalem (Luke 23,26-32)," *Bib* 68 (1987) 221-244.
- Spencer, P.E. *Rhetorical Texture and Narrative Trajectories of the Lukan Galilean Ministry Speeches* (London and New York: T & T Clark, 2007).
- Talbert, C. *Reading Luke — Acts in its Mediterranean Milieu* (Leiden: Brill, 2003).
- Tannehill, R. *The Narrative Unity of Luke — Acts* (2 vols; Philadelphia: Fortress, 1986).
- Zimmermann, H. "Selig, die das Wort hören und es bewahren: eine exegetische Studie zu Lk 11,27f.," *Catholica* 29 (1975) 114-119.

ヨハネによる福音書関係

- Barrett, C.K. *The Gospel according to St. John* (2nd. Ed.; London: SPCK, 1978).
- Becker, J. *Das Evangelium nach Johannes* (KTKNT 4/1-2; 2. durchgesehene Aufl.; Gütersloh: Gerd Mohn, 1984-1985).
- Bittner, W.J. *Jesu Zeichen im Johannesevangelium. Die Messiaserkenntnis im Johannesevangelium vor ihrem jüdischen Hintergrund* (WUNT 2.26; Tübingen: J.C.B. Mohr, 1987).
- Boismard, M.É. "Le lavement des pieds (Jn XIII 1-19)," *RB* 71 (1964) 5-24.
- Bonney, W. *Caused to Believe: The Doubting Thomas Story at the Climax of John's Christological Narrative* (Leiden: Brill, 2002).
- Bornkamm, G. "Der Paraklet im Johannesevangelium," in ders., *Geschichte und Glaube* (2 BDe; München: Kaiser, 1968) 1.12-35.

- _____. “Die Zeit des Geistes. Ein johanneisches Wort und seine Geschichte,” in *ibid.*, 1.90-103.
- Braun, F.-M. “Le lavement des pieds et la réponse de Jésus à Saint Pierre (Jean XIII 4-10),” *RB* 44 (1935) 22-33.
- Brown, R.E. *The Gospel according to John* (2 vols ; AB29-29A ; Garden City : Doubleday, 1966-1970).
- Bultmann, R. *Das Evangelium des Johannes* (KEK4 ; 10.Aufl. ; Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1941).
- Carson, D.A. *The Gospel according to John* (Grand Rapids : Eerdmans, 1991).
- Dauer, A. “Zur Herkunft der Thomasperikope Joh 20,24-29,” in *Biblische Randbemerkungen* (FS. R. Schnackenburg ; H. Merklein/J. Lange (Hg.) ; Würzburg : Echter, 1974) 56-76.
- Dodd, C. H. *The Interpretation of the Fourth Gospel* (Cambridge : Cambridge University Press, 1953).
- Dunn, J.D.G. “The Washing of the Disciples Feet in Joh 13,1-20,” *ZNW* 61 (1970) 247-252.
- Frey, J./U. Schnelle (Hg.). *Kontexte des Johannesevangeliums. Das vierte Evangelium in religions- und traditionsgeschichtlicher Perspektive* (WUNT 175 ; Tübingen : J.C.B. Mohr, 2004).
- 原口尚彰「ヨハネによる福音書におけるマカリズム（幸いの宣言）」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第28号（2010年）33-48頁
- Hultgren, A.J. “The Johannine Footwashing (13, 1-11) as Symbol of Eschatological Hospitality,” *NTS* 28 (1982) 539-546.
- Judge, P.J. “A Note on Jn 20,29,” in *The Four Gospels* (3 vols ; FS. F. Neyrey ; Louvain : Louvain University, Press, 1992) 3.2183-2192.
- Lambard, H.A./W.H. Oliver, “A Working Supper in Jerusalem : John 13 : 1-38 Introduces Jesus’ Farewell Discourses,” *Neot* 25 (1991) 357-378.
- Lee, D.A. “Partnership in Easter Faith : The Role of Mary Magdalene and Thomas in John 20,” *JSNT* 58 (1995) 37-49.
- Lindars, B. *The Gospel of John* (London : Marshall, Morgan & Scott, 1972).
- Michl, J. “Der Sinn der Fußwaschung,” *Bib* 40 (1959) 697-708.
- Mußner, F. “Die Fußwaschung (Joh 13,1-17),” *Glaube und Leben* 31 (1938) 25-30.
- Moloney, F.J. *The Gospel of John : Text and Context* (Leiden : Brill, 2005).
- Onuki, T. “Die johanneischen Abschiedreden und die synoptische Tradition,” *AJBI* 3 (1977) 157-268.

- 大貫隆『福音書研究と文学社会学』岩波書店, 1991年
- Porsch, F. *Pneuma und Wort. Ein exegetischer Beitrag zur Pneumatologie des Johannesevangeliums* (J. Knecht, 1974).
- Richter, G. *Die Fußwaschung im Johannesevangelium. Geschichte ihrer Deutung* (Regensburg : Pustet, 1967).
- _____. *Studien zum Johannesevangelium* (Regensburg : Pustet, 1977).
- Robinson, J.A.T. "The Significance of the Footwashing," in *Neotestamentica et Patristica* (FS. O. Cullmann ; Leiden : Brill, 1962) 144-147.
- Shlatter, A. *Der Evangelist Johannes* (Stuttgart : Calwer, 1922).
- Schnackenburg, R. *Das Johannesevangelium* (HThKNT 4 ; 4 Bde ; Freiburg : Herder, 1965-1984).
- Schneider, S. "The Footwashing (John 13 : 1-20) : A Experiment in Hermeneutics," *CBQ* 43 (1981) 76-92.
- Schnelle, U. *Antidoketische Christologie im Johannesevangelium* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1987).
- _____. "Johannes als Geist-theologe," *Nov Test* 40 (1998) 17-31.
- Schwank, B. "'Selig, die nicht sehen und doch glauben' (20,19-31)," *Sein und Sendung* 29 (1964) 435-450.
- Segovia, F. "John 13 : 1-20. The Footwashing in the Johannine Tradition," *ZNW* 73 (1982) 31-51.
- Swetnam, J. "Bestowal of the Spirit in the Fourth Gospel," *Bib* 74 (1993) 556-576.
- 土戸清『ヨハネ福音書研究』創文社, 1994年
- Thyen, H. *Das Johannesevangelium* (HbNT 4 ; Tübingen : J.C.B. Mohr, 2005).
- Van Belle, G./J.G. van der Watt/P. Maritz. *Theology and Christology in the Fourth Gospel : Essays by the Members of the SNTS Johannine Writings Seminar* (Leuven : Peeters, 2005).
- Weiser, A. "Joh 13,12-20. Zufügung eines späteren Herausgebers?," *BZ* 12 (1968) 252-257.
- Weiss, H. "Footwashing in the Johannine Community," *NovTest* 21 (1979) 298-325.
- Wengst, K. *Das Johannesevangelium* (2 Bde ; ThKNT 4/1-2 ; Stuttgart : Kohlhammer, 2000-2001).
- Wenz, H. "Sehen und Glauben bei Johannes," *TZ* 17 (1961) 17-25.
- Wilckens, U. *Das Evangelium nach Johannes* (NTD4 ; Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1998).

Zumstein, J. *Kreative Erinnerung. Relecture und Auslegung im Johannesevangelium* (Zürich : Theologischer Verlag, 2004).

パウロ関係

Barrett, C.K. *The Epistle to the Romans* (2nd ed. ; London : A & C Black, 1991).

_____. *The First Epistle to the Corinthians* (London : A & C Black, 1968).

Betz, H.D. *Galatians* (Philadelphia : Fortress, 1979).

Borgen, P. "Philo of Alexandria," *ABD* 5.337-339.

_____. *Philo of Alexandria : An Exegete for his Time* (Leiden : Brill, 1997).

Borgen P./K. Fuglseth/R. Skarsten, *The Philo Index : A Complete Greek Word Index to the Writings of Philo of Alexandria* (Grand Rapids : Eerdmans ; Leiden : Brill, 2000).

Cranfield, C.E.B. *The Epistle to the Romans* (2 vols ; ICC ; Edinburgh : T & T Clark, 1975-1979).

Dunn, J.D.G. *Romans* (2 vols ; WBC 38AB ; Dallas : Word, 1988) Koch, D.-A. *Die Schrift als Zeuge des Evangeliums. Untersuchungen zur Verwendung und zum Verständnis der Schrift bei Paulus* (Tübingen : Mohr, 1986).

Fitzmyer, J.A. *Romans* (AB33 ; New York : Doubleday, 1993).

原口尚彰『パウロの宣教』教文館, 1998年

同『ガラテヤ人への手紙』新教出版社, 2004年

Jewett, R. *Romans* (Minneapolis : Fortress, 2007).

Käsemann, E. *An die Römer* (2.Aufl. ; Tübingen : Mohr, 1974).

Lohse, E. *Der Brief an die Römer* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 2003).

Michel, O. *Der Brief an die Römer* (12. Aufl. ; Tübingen : Mohr, 1963).

Wilckens, U. *Der Brief an die Römer* (2. verbesserte Aufl. ; EKK VI/1-3 ; Zürich : Benzinger Verlag ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1987-1989).

Schrage, W. *Der erste Brief an die Korinther* (EKK VII/1-4 ; Zürich : Benzinger Verlag ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1991-2001).

ヤコブの手紙関係

Avemarie, F. "Die Werke des Gesetzes im Spiegel des Jakobusbriefs," *ZThK* 98 (2001) 282-309.

Baasland, E. "Jakobusbrief als neutestamentliche Weisheitsschrift," *StTh* 36

- (1982) 119-139.
- Barth, M. “πίστις, πιστεύω,” *EWNT* 3.216-231.
- Bauchham, R.J. “The Wisdom of James and the Wisdom of Jesus,” in *The Catholic Epistles and the Tradition* (ed. J. Schlosser ; Leuven : Leuven University Press, 2004) 75-92.
- Bultmann, R. “πιστεύω, πίστις κτλ.,” *ThWNT* 6.174-230.
- Burchard, C. *Der Jakobusbrief* (HbNT 15/1 ; Tübingen : J.C.B. Mohr, 2000).
- _____. “Zu Jakobus 2,14-26,” *ZNW* 71 (1980) 27-45.
- Dibelius, M. *Der Brief des Jakobus* (KEK ; 11.Aufl. ; hrsg. v. H. Greeven ; Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1964).
- Donker, C.E. “Der Verfasser des Jakobus und sein Gegner. Zum Problem des Einwandes in Jak 2,18-19,” *ZNW* 72 (1981) 241-256.
- Frankemölle, H. *Der Brief des Jakobus* (GTB 517 ; ÖTKKNT 17/1-2 ; Gütersloh : Gütersloher Verlagshaus ; Würzburg : Echter, 1994).
- _____. “Zum Thema des Jakobusbriefes im Kontext der Rezeption von Sir 2,1-18 und 15,11-20,” *BN* 48 (1989) 21-49.
- Halson, B.R. “The Epistle of James : ‘Christian Wisdom ?’,” *Studia Evangelica IV* (Berlin : Akademie, 1968) 308-314.
- Hartin, P.J. *James* (Sacra Pagina 14 ; Collegeville : Liturgical Press, 2003).
- Hengel, M. “Der Jakobusbrief als antipaulinische Polemik,” in *Tradition and Interpretation in the New Testament* (ed. G.F. Hawthorne/O. Betz ; Grand Rapids : Eerdmans ; Tübingen : Mohr, 1987) 248-278.
- Hoppe, R. *Der theologische Hintergrund des Jakobusbriefes* (Würzburg : Echter, 1977).
- Johnson, L.T. “Reading Wisdom Wisely,” *Louvain Studies* 28 (2003) 99-112.
- Lockett, D. “The Spectrum of Wisdom and Eschatology in the Epistle of James and 4Q Instruction,” *TynBul* 56 (2005) 131-148.
- Lohse, E. “Glaube und Werke,” *ZNW* 48 (1957) 1-22.
- Luck, U. “Die Theologie des Jakobusbriefes,” *ZThK* 81 (1984) 1-30.
- _____. “Weisheit und Leiden. Zum Problem des Paulus und Jakobus,” *ThLZ* 92 (1967) 253-258.
- Lührmann, D. “Pistis im Judentum,” *ZNW* 64 (1973) 19-38.
- Maier, G. *Der Brief des Jakobus* (Wuppertal : Brpockhaus ; Giessen : Brunnen, 2004).
- Mußner, F. *Der Jakobusbrief* (3. erweiterte Aufl. ; Freiburg : Herder, 1975).
- Penner, T.C. *The Epistle of James and Eschatology : Re-reading an Ancient Chris-*

- tian Letter* (JSNTS 121 ; Sheffield : Sheffield Academic Press, 1996).
- Popkes, W. *Der Brief des Jakobus* (ThHKNT 14 ; Leipzig : Evangelische Verlagsanstalt, 2001).
- Ropes, J.H. *A Critical and Exegetical Commentary on the Epistle of St. James* (Edinburgh : T. & T. Clark, 1916).
- 辻学『ヤコブの手紙』新教出版社, 2002年

ペトロの手紙一関係

- Best, E. “1 Peter and the Gospel Tradition,” *NTS* 16 (1970) 109.
- Michaelis, J.R. *1 Peter* (WBC49 ; Waco, TX : Word, 1988).
- Achtemeier, P.J. *1 Peter* (Hermeneia ; Minneapolis, Fortress, 1996).
- Best, E. “1 Peter and the Gospel Tradition,” *NTS* 16 (1970) 95-113.
- Brox, N. “Der erste Petrusbrief in der literarischen Tradition des Urchristentums,” *Kairos* 20 (1978) 182-192.
- _____. *Der erste Petrusbrief* (EKK 21 ; 2. Durchgesehne und ergänzte Aufl. ; Zürich : Benzinger ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1986).
- Elliott, J. H. *1 Peter* (AB37B ; New York : Doubleday, 2000).
- Feldmeier, R. *Der erste Brief des Petrus* (ThHKNT 15/1 ; Leipzig : Evangelische Verlagsanstalt, 2005).
- Nauck, W. “Freude im Leiden. Zum Problem einer urchristlichen Verfolgungstradition,” *ZNW* 46 (1955) 68-80.
- Goppelt, L. *Der erste Petrusbrief* (KEK ; Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1978).
- Metzner, R. *Die Rezeption des Matthäusevangeliums im 1. Petrusbrief* (WUNT II.74 ; Tübingen : Mohr, 1995).
- Schelkle, K.H. *Die Petrusbriefe, Der Judasbrief* (Freiburg : Herder, 1976).
- Schweizer, E. *Der erste Petrusbrief* (Zürich : Theologischer Verlag, 1988).
- Selwyn, E.G. “Eschatology in 1 Peter,” in *The Background of the New Testament and its Eschatology* (FS. C.H. Dodd ; eds. W.D. Davies/D. Daube ; Cambridge : Cambridge University Press, 1956) 394-401.
- _____. *The First Epistle of St. Peter* (2nd ed. ; Grand Rapids : Baker, 1946).

黙示録関係

- Aune, D.E. *Revelation* (3 vols ; WBC 52A-C ; Waco, TX : Word, 1997-98).
- Cruz, V.P. “The Beatitudes of the Apocalypse : Eschatology and Ethics,” in *Perspectives on Christology* (eds. M. Shuster/R. Muller ; Grand Rapids :

- Zondervan, 1991) 269-283.
- Frankfurter, “The Legacy of Jewish Apocalypses in Early Christianity : Regional Trajectories,” in *The Apocalyptic Heritage in Early Christianity* (eds. J.C. VanderKam/W. Adler ; Assen : Van Gorcum ; Minneapolis : Fortress, 1996) 133-136.
- Griffin, M. “The Flavians,” in *Cambridge Ancient History* (vol. 11 ; Cambridge : University Press, 2000) 81-82.
- 原口尚彰「黙示録における幸いの宣言」『新約学研究』第35号(2007年)48-62頁
- 同「新約聖書と黙示文学・黙示思想」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第25号(2007年)61-76頁
- 同「黙示録1:4-3:22の書簡論的考察:両義性の文学的効果」『基督教論集』第46号(2003年)28-34頁
- Nwachukwu, O. *Beyond Vengeance and Protest : A Reflection on the Macarism in Revelation* (New York : Peter Lang, 2005).
- Price, S.R. *The Roman Imperial Cult in Asia Minor* (Cambridge : University Press, 1984) 123-126 ; 197-198.
- Puech, E. “4Q525 et les péripécopes des Béatitudes en Ben Sira et Matthieu,” *RB* 98 (1991) 80-106.
- Schüssler Fiorenza, E. *The Book of Revelation : Justice and Judgment* (2nd ed. ; Minneapolis : Fortress, 1998) 133-156.
- 佐竹明『ヨハネの黙示録』下巻, 新教出版社, 1989年
同『ヨハネの黙示録』下巻(新版), 新教出版社, 2009年
- Sato, M. *Q und Prophetie* (WUNT 2/29 ; Tübingen : Mohr, 1988) 247-264.
- S. Schulz, Q. *Die Spruchquelle der Evangelisten* (Zürich : Theologischer Verlag, 1972) 76-84.
- Vielhauer, P./G. Strecker, “Apokalypsen und Verwandtes : Einleitung,” in *Neutestamentliche Apoklyphen* (ed. W. Schneemelcher ; 2 Bde. ; Tübingen : Mohr, 1989) 2.515.
- Witherington III, B. *Revelation* (Cambridge : University Press, 2003) 5-10 ; 23-31.
- Worth, R.H. *The Seven Cities of the Apocalypse* (New York : Paulist, 1999) 112-130.

使徒教父関係

- Bauer, W. / H. Paulsen. *Die Briefe des Ignatius von Antiochia und der Polykarp-*

- brief* (Tübingen : Mohr, 1985).
- Del Verme, M. *Didache and Judaism : Jewish Roots of an Ancient Christian-Jewish Work* (New York / London : T & T Clark International, 2004).
- Draper, J.A. ed., *The Didache in Modern Research* (Leiden : Brill, 1996).
- Hagner, D.A. *The Use of the Old and New Testaments in Clement* (NTSup 34 ; Leiden : Brill, 1973).
- 原口尚彰「使徒教父文書における幸いの宣言」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第25号(2007年)33-48頁
- Jefford, C. *The Didache in Context : Essays on the Text, History and Translation* (Leiden : Brill, 1995).
- _____. *Reading the Apostolic Fathers : An Introduction* (Peabody, MA : Hendrickson, 1996).
- _____. *The Sayings of Jesus in the Teaching of the Twelve Apostles* (Leiden : Brill, 1989).
- Knoch, R. *Die Lehre der zwölf Aposteln* (Tübingen : Mohr, 1920).
- Köster, H. *Synoptische Überlieferung bei den apostolischen Vätern* (Berlin : Akademie, 1957).
- Lindemann, A. *Die Clemensbriefe* (HBNT 17 ; Tübingen : Mohr, 1992).
- Lona, H.E. *Der erste Clemensbrief* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1998).
- Massaux, É. *Influence de l'Évangile de saint Matthieu sur la littérature chrétienne avant saint Irénée* (de. F. Neiryck ; BETL 75 ; Leuven : University Press, 1950). ET : *Influence of the Gospel of Saint Matthew on Christian Literature before Saint Irenaeus* (3 vols ; Macon, GA : Mercer University Press, 1990-93).
- Niederwimmer, K. *The Didache : A Commentary* (Hermeneia ; Philadelphia : Fortress, 1998).
- Oxford Society of Historical Theology. *The New Testament in the Apostolic Fathers* (Oxford : Clarendon, 1905).
- Osiek, C. *Shepherd of Hermas* (Hermeneia ; Minneapolis : Fortress, 1999).
- Paget, J.C. *The Epistle of Barnabas : Outlook and Background* (WUNT II.64 ; Tübingen : Mohr, 1987).
- Paulsen, H. *Studien zur Theologie des Ignatius von Antiochien* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1978).
- Radke, H. *Ignatius von Antiochien und die Paulusbriefe* (Berlin : Akademie, 1967-68).
- Rhodes, J.N. *The Epistle of Barnabas and the Deuteronomic Tradition* (WUNT II.

188 ; Tübingen : Mohr, 2004).

Schoedel, W.R. *Ignatius of Antioch* (Hermeneia ; Philadelphia : Fortress, 1985).

Wengst, K. *Didache (Apostellehre)* (Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1994).